

その他 (書評)

書評: 嶋田学 著『図書館・まち育て・デモクラシー: 瀬戸内市民図書館で考えたこと』

福井 雄大

(滋賀文教短期大学 助教)

著者は奈良大学教授を経て、現在京都橘大学で教鞭を取り図書館情報学の研究において活躍しているが、それまで一貫して市町村立図書館でならしてきた歴戦の公共図書館員である。豊中市立図書館からキャリアを始め、永源寺町立図書館、自治体合併に伴う改組で2005年より東近江市立図書館に司書として従事した。その後瀬戸内市の図書館新設にあたって準備室長として、開館後は館長として瀬戸内市立図書館の運営に尽力した実践者でもある。

著者の来し方に紙幅を割くのには理由がある。本書で描かれるのは、著者が経験した複数の図書館の現場で培った考えであり、またそのような経歴によってのみ可能な語りであるからだ。

図書館員と利用者とのやり取りは主に、医療における診察室のような閉鎖的な空間ではなく第三者による観測の余地の残された開かれた空間で発生する。したがって、図書館員がそのようなやり取りの得難い事例について話題にしたいと考える場合、第三者による特定を避けるために事例の抽象化を試みる必要がある。しかし自治体に登用される図書館員は、多少の異動はあれど組織的な制約の下で長く勤め上げる人が多く、利用者は生活圏外の図書館を利用することは少ない。れっきとした地域的限定がある以上、事例の十分な抽象化には細心の注意が求められる。そして何より図書館員は言論を取り扱う機関の一員として利用者の秘密を守ることを徹底しなければならない。事例を構成する要素が利用者の秘密にあたるか否かを判断する権限

は、個人間での信頼関係を認められない限り図書館員にはなく合意を得る必要がある。このような事情を踏まえ、喫茶店であれ宴席であれ、図書館員は利用者との交流に関する話題については特に口外を憚るのが常である。しかし長い年月と複数館での勤務というユニークな経歴を持つ著者は、これまで利用者と築いた関係性を元に興味深いやり取りを十分に抽象化し話題にできる貴重な立場にあり、本書は日の目を見ることの少ない図書館員と利用者のエピソードをふんだんに盛り込んでいる。そのような意味で、著者は持てる者の義務を果たすことに成功しているように思う。

本書は著者の知見と実践に基づいて、民主主義の砦としての公共図書館の機序について説明を試みる意欲作である。出版から時間が経過しているが、著者は本学会に属しており、以降国内で出版された図書館に関連する本の中でも本書はユニークな存在感を持つと評者には感じられるため、改めて取り上げる。構成の鳥瞰図は先行する書評1)においても描かれているため、ここでは概要を示したい。

第1章では、図書館が担い手となる読書という行為の持つ可能性を論じ、2010年代以降標榜される地域活性化やにぎわい創出という日本の図書館に求められるテーマの解釈を行う。図書館の意義について考える必要性を提起し、住民の社会参加に資する図書館像を導出する。

第2章では、図書館という空間が伝達する文化や醸成する文化に関する論考を通じて、地域

に求められる図書館の役割が示される。文化と経済の地域間格差を問題として取り上げ、先に示された図書館像に加え文化の地域間格差の是正や独自文化の育成に寄与するという役割が重ね合わせられる。

第3章では、瀬戸内市の新図書館整備における著者の実践が語られる。当初新館設立にあたって設定された住民との対話の場が図書館を積極的に活用する地域コミュニティへと発展した事例や、担当者の育成が前例の踏襲でない独特の図書館事業の持続的発展を担保することになった事例について詳述される。

第4章では、まちづくり改め「まち育て」がその地域と縁のある人々への教育や相互関係によってないうるという前提を共有した上で、そのような目的に綴じ蓋として対応できる既存の生涯学習施設としての図書館の役割について論じられる。図書館は地域の必要と課題の集積地であり、図書館員及び行政の役割は図書館を通じた政策形成の検討であると結論付けている。

第5章では、図書館業務におけるコレクション構築を取り上げ、実務家の知見を踏まえた議論の整理が行われる。本書のテーマである「まち育て」の観点から蔵書構築を終わりのない試行錯誤であるとしつつも、提示する枠組みの下で操作可能なパラメータや著者が注意を払ってきたエッセンス・ロジックが惜しげなく紹介されている。

第6章では、特に公立の図書館において無視できない政治的状況と依拠すべき行動原理について、経験を元に語られる。「心と頭でおこることのほとんどすべてに、何らかの関与が可能(p.266)」という図書館の射程が、「まち育て」とその延長線上にある民主主義制度に好ましい影響を及ぼす上で留意すべき点が挙げられている。

全体を通じて展開されるのは、図書館と民主主義の密接な結びつきの確認である。民主主義

の後ろ盾としての図書館の役割は定量的な観測が難しく、日本社会においてあまり意識されない傾向にある。しかし『ユネスコ公共図書館宣言』(1994年)前文にも明記される通り図書館の社会的価値の一であり、本書は経験的事例の紹介を通じてこの理念に通じる実践と思索をまとめて上げている。またそれを準えるような執筆姿勢の下選挙権を持たない子どもにも目配せを欠かさず、図書館の教育的役割を提示している。

一方で、時代の要請に応じて変化を続ける公共施設の目的を実現するために、図書館経営においても市場競争の世界で培われてきたマーケティング的手法を導入したり編み出すことを求める、という姿勢も一貫している。図書館をより豊かに活用してもらいたいという職業人としての信念に基づいて、図書館員も一定の規範の中で戦略的にふるまうことを推奨している。公共図書館のステークホルダー(利害関係者)は誰かという問いを手がかりに、図書館の立地する地域性に注目し、地域に所縁のある人々の満足を公共施設の運営原理として位置付け、交流を通じてステークホルダーの支持を取り付けることで図書館と地域が共に充実するというビジョンが示されている。人間関係の流動化が指摘される現代社会においては、関係者が関係を確認することが目的の集まりにも大いに意味がある、という蔑ろにされがちな価値に光を当てている。

総合すると、図書館文化に対する深い理解の下で近視眼的、表層的な効率主義に反目しつつ、地に足のついた図書館振興戦略が展開されている。このような実践に基づく見解は公共図書館の現場に特に異論なく受け入れられるもののようにも思えるが、それができない日本の図書館経営の現実を要所所で論じることで何が問題であるかが強調され、価値観のアップデートを促す内容となっている。

但し、本書には幾つかの課題も存在する。

まず本書は基本的に複数誌に掲載された性質の異なる論考をまとめたものであり、特定の読者を想定したものではない。また著者の思索を跡付ける形で記述されており、それが本書の唯一無二の魅力に繋がっている一方、章立てはあれど体系立っているとは言い難い。例えば過去に本誌で掲載された同著者の比較政策論 2) には本書第 6 章と共通する問題意識があるが、本書は特定の形式に則らず記されているためその意図を読み取りにくい。第 5 章は経営的観点と既存の図書選択論を一政策として捉えた上で自説を展開した書き下ろしとなっており読み応えがあるが、本旨と絡まない要素も網羅的に紹介される点については初学者向けと思われる冗長に感じる部分もあった。開かれた言論とはそういうものなのかもしれないが、一方で図書館に関心がなく悪しかれと思う者にも主旨が伝わるかどうか顧みたところ、私には難しいように思えた。

また、情報環境の現況に関する記述が少ない点も惜まれる。例えば現代において圧倒的な普及率を誇る情報端末を意味する「スマートフォン」という語は本文中において 3 箇所しか出現しない。インターネットや SNS によって個人が集団に属し、また組織が個人の集合を制御することが容易になったと見る向きがあるにもかかわらず、そのようなコミュニティと図書館の接点については言及が見当たらなかった。このような点は地域性に力点を置く本書のコンセプトにそぐわないとして意図的に取り上げなかったものとも思われるが、インターネットや SNS は「まち育て」にも有効に用いられうるものである。情報通信技術の活用について図書館に精通した著者だけが語れる何かが少なからずあるように思う身として残念に感じた。

最後に、民主主義社会における信頼の重要性について言葉が尽くされている一方で、図書館が利用者や地域社会と信頼関係を築く上で図書

館員が取るべき行動に関するノウハウについては直接的に語られずじまいであった点も気に掛かった。著者は図書館が涵養すべきものとして「知と理性による信頼のエートス」を挙げているが、それはコミュニケーションの余地を生み出す対話的理性に基づくものであって、予約資料を期限内に取りに来なかったりレファレンスの結果を聞き終わらない内に無言で踵を返すような類の図書館利用に垣間見える道具的理性とは区別すべきものと思われる。つまり、図書館と社会の信頼関係は図書館員-利用者間のコミュニケーションが基盤となると考えられ、本書でもそのような見方が示されている。一方で、情報資源の信頼性を図書館の信頼性に敷衍する記述が各章で目に付き、地域社会の信頼を獲得していると思われる瀬戸内市立図書館での実践が記された第 3 章では図書館の信頼性に関する記述は目立たない。自己言及のパラドックスを避けるべく信頼が築かれる過程に関する考察を省いているとも考えられるが、結果として蔵書を通じて図書館員 - 利用者間に信頼性が築かれるという考えに比重を置いているように見えてしまうのは本意ではないと推察する。本書ではこれからの図書館員には従来の専門性を拡張した高度な能力が求められるとしているが、その内実である人間性やコミュニケーション能力の具体的に意味するところは今後の課題となっている。

絶賛をもって迎え入れられた本書の書評としては後発であるため 3) あえて辛口で評させていただいたが、本書の主旨に異論はない。中小規模の書店の減少が著しく進む中で地域の図書館も同様にその価値を試される時代となっている。民主主義を発展させられないのであれば、図書館が特権的に館内/館外において無償で資料提供を行う「無料貸本屋」であり続けることは許されるはずがない。図書館と民主主義の関係性を実態に即して再考することには意義があ

り、本書では説得力を持った図書館論が提示されている。

また、『中小都市における公共図書館の運営』(1963 年) 以来繰り返し指摘されているように、図書館経営への参画に消極的であったり管理職・管理業務への理解が不足している図書館員は少なからずいる。あるいは図書館の日々の業務に理解のない管理職も存在する。そこには指定管理者制度の普及といった制度的要因による歪みも含まれよう。この問題に図書館員と管理職の双方から一定の努力が重ねられてきたが、運営に摩擦のある図書館という構図が社会や行政組織の中で相対的に変わったとは言えないのが日本の現状である。図書館の長年の弱みを克服するにあたって、本書には先駆者たる著者の知見が図書館の如く取り揃えられており、その目的において第 1 章で解説される「わかる」という体験を約束する心憎い構成となっている。前述の通り著者によって書かれるべき内容はまだ多く残っているため、今後の論考の発表を心待ちにするところである。

嶋田学『図書館・まち育て・デモクラシー：
瀬戸内市民図書館で考えたこと』

青弓社 2019.9 288p 19cm

ISBN 978-4-7872-007-6

定価 2,600 円 (税別)

注

- 1) 各章毎に簡潔に要約したものとして、永利和則「書評『図書館・まち育て・デモクラシー瀬戸内市民図書館で考えたこと』」『日本図書館情報学会誌』66(2), 2020, p.71-72.
- 2) 嶋田学「20 世紀後半における英国、及び米国の図書館と日本の図書館政策へのその影響：ポスト福祉国家の我が国図書館を展望する」『Journal of I-LISS Japan』2(1), 2019, p.26-51.
- 3) 学術雑誌では小泉公乃「《書評》嶋田 学 著『図書館・まち育て・デモクラシー：瀬戸内市民図書館で考えたこと』」『図書館界』71(6), 2019, p.350-351, 専門誌では『図書館雑誌』『みんなの図書館』に、ほか書評誌や新聞等においても書評の掲載を確認している。